

# 清末の日本語学習書からみる日本語教育

## —『寄学速成法』を通して—

魏 維

### 1 はじめに

中国における日本語教育は日清戦争後まで遡ることができる。敗戦を迎えた清国政府は日本に関心を持つようになり、同文館<sup>1</sup>で日本語教育を始め、積極的に日本へ留学生を派遣した。一方、西洋文化を求めている民間の知識人はこの時期に、「同文同種」<sup>2</sup>に影響されて、西洋文化への近道として日本語を習得しようとする意欲が高まった<sup>3</sup>。この気運に乗って、多くの日本語教習が輩出され、清国人に対する日本語の教科書<sup>4</sup>や東文学堂<sup>5</sup>も続々と現れた。

近年、清末の日本語教育の研究に取り込む研究者が増えるにつれて、当時の多くの日本語教育者の活動や教科書などが掘り起こされ、研究対象とされるようになった。特に、劉建雲（2005）の研究は、清末の東文学堂に関する史料に基づき、歴史的な視点から当時の日本語教育の実態を明確にした。また、鮮明（2011）は中日各図書館に現存する日本語教科書17種類を分析している。日本語教科書の著者に応じて、「日本人編纂」、「中国人編纂」、「漢訳日語文典」と分けて論じられている。このような研究状況にあって、温州図書館に現存する『寄学速成法』という1901年に出版された清末の日本語学習書は注目されなかった。実際、章（2013）<sup>6</sup>の研究以外に、この学習書の内容に関する記述は管見の限り見当たらない。当時温州の教育家であった孫詒讓<sup>7</sup>は、祭文で「林文潜が算学に精通し、翻訳に長けて日本へ留学したことがある。特に著作の『寄学速成法』は多くの人から絶賛を博した」と評価している。この点から、『寄学速成法』が当時の日本語学習者に一定の影響を与えていたことが認められる。したがって、本稿はこれまでの研究では言及されなかった『寄学速成法』という日本語学習書に焦点を当て、分析対象とする。具体的には、言語学的・言語教育的側面から学習書进行分析することにより、『寄学速成法』の教育目標、音声教育や文法教育の内容を考察し、清末の日本語教育の実態を探る。さらに、同じく速成法と称される『和文漢読法』と対照しながら、『寄学速成法』が初期の日本語学習書としてどのような特徴を持つのかを検討する。

## 2 林文潜と杭州日文学堂について

『寄学速成法』は1901年12月に林文潜<sup>8</sup>によって編纂されたものである。図1の奥付からわかるように、発行者は温州瑞安虹橋の寄社であり、刊印者は翁宏昌である。ここで注意すべきことは、翁宏昌の住所である「杭州城内忠清港」が1899年1月20日（旧暦）に日本東本願寺<sup>9</sup>によって開設された杭州日文学堂の所在地でもあったことである。『張綱日記』<sup>10</sup>には、林文潜<sup>8</sup>が1901年1月の末頃（旧暦）、上海を経由して杭州にある学堂へ日本語を勉強しに行くという記述があり、『寄学速成法』は林文潜<sup>8</sup>が杭州日文学堂で日本語を勉強してから書かれたものであると推測できる。杭州日文学堂における日本語教育が一体どれほど実践されていたかははっきりしていない。しかし、『張綱日記』<sup>11</sup>において、わずか一年間で本を完成させた林の才能を絶賛していたことや、林が当時杭州の有名な翻訳雑誌である『訳林』<sup>12</sup>の翻訳の仕事を担当していたことから、杭州日文学堂で日本語教育を受けた林文潜は相当な日本語能力を身につけていたと推測できる。

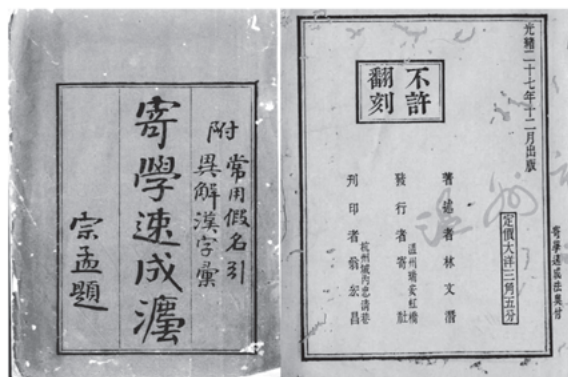


図1 『寄学速成法』の表紙と奥付

## 3 『寄学速成法』について

### 3-1 『寄学速成法』の構成

『寄学速成法』は「序」、「自序」、「目録」、「緒言」、「本文」を含めた67頁から構成されている。図1の『寄学速成法』の表紙が示すように、「寄学速成法 附常用假名引具解漢字彙」という記載とともに「宗孟題」とあり、この表紙が林文潜と同じ杭州日文学堂で勉強していた同窓である林長民<sup>13</sup>（字宗孟）が書いたものであると推測できる。本の冒頭に記載されているのは宋恕<sup>14</sup>による「序」と林文潜の「自序」である。「寄学速成法者、以導震旦人讀文明邦種種哲学化学書籍者也。文明書籍東邦備已」（寄学速成法という本は、清国人に先進国の哲学、科学などのような日本が既に所持している書籍を読ませるためにできた本

である)という「自序」から、西洋の先進文化を取り入れるため日本語を勉強していたことがわかる。目録には、「寄学速成法」の右下に「原名廣和文漢讀法」と記入されている。これに関し、前掲の1902年1月16日の『張綱日記』に記入されているように、書名が『広和文漢讀法』から『寄学速成法』に改称されたことと一致している。書名変更の経緯については言及されていないが、該当学習書の内容は「和文漢讀法」や「速成」に関わっていることがわかる。この点については後述する。

本文は23章からなり、具体的な事項を表1にまとめておく。『寄学速成法』はすべて漢語で説明されている。現在の日本語教科書と異なり、各章に内容の概要、分類、図表を挙げ、説明を加えるだけで、章の最後に練習問題などは付けていない。ここから、語学力の向上を求めるといよりはむしろ、日本語に関する知識を紹介することに重点を置いた入門者向けの本であると言えよう。ただし、目録に書かれている「付録」の「常用假名引」と「異解漢字彙」は今回の史料に欠落しているため、分析の対象外とする。

表1 『寄学速成法』の内容

章	内容	解釈・説明
第一章	緒言	
第二章	字母	五十音図、清音、濁音、半濁音、撥音表
第三章	音韻	訓讀、音讀、通變音、拗音、促音、引音、略音、添音、通音の説明
第四章	詞之別	品詞の十種類 (第五章から第十四章)
第五章	名詞	無論有形無形、凡可名者、謂之名詞…分普通特別二種 例:山、西湖
第六章	代名詞	代呼事物之名称謂之代名詞、分人稱場處方向事物指示五種 例:ワ (我)、ココ (此處)、ドナタ (誰)
第七章	副詞	用於動詞形容詞之上、以限制其語意之詞 例:イマ (今)、常二
第八章	接續詞	連接上下文上下句上下字者 例:或ハ、及ビ
第九章	感歎詞	感慨歎息之詞…有用於發語時、有用於接結尾時 例:アハレ、アア
第十章	動詞	用於體言之下、以表事物之動詞形狀之詞…分自動詞他動詞二種…動詞變法表
第十一章	形容詞	用於名詞之前後、以形容其形狀性質之詞;形容詞活用表
第十二章	助動詞	用於動詞下、以補足其意之詞…分十一種;助動詞活用表
第十三章	屬詞	附屬於各種詞以定其關係之詞…又謂之天爾遠波、關係詞、脈絡詞、助詞 例:ニ、ヲ、ナ、ヨ
第十四章	接詞	接于各詞之頭尾、以成複語之詞、謂之接詞、分接頭接尾二種 例:ハツ (初)、オ (御)、ドモ (等)
第十五章	合字	日文中用處最多之字、有用簡寫法者、謂之合字 例:ㇿ コト之合字

第十六章	符號	例:「」、一、々
第十七章	借字	假借漢字、以強就日語者也 例:屹度、揚句
第十八章	和字	日人撰製之字、形似漢字者 例:間、働、畑
第十九章	新字	形狀亦似漢字、因西書中新器新語、有漢字所無者、故添著新字以譯之也 例:積、糧
第二十章	閒字	日文中有常用之字、譯書時可略之者 例:有(アリ)、居(ヨリ)
第二十一章	句之解剖	有主語、有客語、有補足語、有用語、而後可以組織成句 例:太郎 <sup>主</sup> 書 <sup>客</sup> ヲ <sup>用</sup> 讀 <sup>用</sup> ム
第二十二章	文之組織	單文、複文、重文
第二十三章	譯例	和文漢訳例

### 3-2 清末における日本語教授法

清末の日本語教授法については以下のものが知られている。

劉建雲（2005）の研究によると、日本を経由して西洋文明を摂取するという中国人学習者の「功を急ぐ」心理との複合作用により、清末の日本語教育に「和文漢読法」という特徴的な教授法が登場した<sup>15</sup>という。しかし、林文潜は「緒言」において数箇所『和文漢読法』について言及し、「和文漢読法」という教授法の欠点を明確に批判した。従って、「和文漢読法」が当時日本語教授法の一部としてあったが、それ以外の教授法も存在していたことは十分に推測される。一方、鮮明（2011）の研究によると、清末の日本語教科書や漢訳日語文典に使われた教授法では、中国の伝統的な音韻学、例えば反切法を用いて、日本語に音を付すという方法や、「実字・虚字」という虚実二分法で日本語の「漢字」と「仮名文字」を区別するという教授法も提案されていた。

ここでは先行研究と対照させて、今まで研究対象とされなかった『寄学速成法』の内容を分析しながら同書で使用された教育方法を検討する。特に、劉（2005）、鮮（2011）が主張した教授法が『寄学速成法』にも当てはまるかどうかを検証し、これらだけでは説明しきれないことを指摘する。

#### 3-2-1 『和文漢読法』と異なる『寄学速成法』

清末の日本語教育において、「漢文訓読」の裏返しである「和文漢読」が独学の日本語学習方法<sup>16</sup>として使われていた。1899年梁啓超は「論学日本文之益」（日本文を学ぶ益を論ずる）を発表し、「数日小成、数月而成」（数日にして小成になり、数か月にして大成になる）と述べ、短期間で日本語を習得することを主張した。その後1900年、日本に留学していた羅普<sup>17</sup>と協同で『和文漢読法』を著した。『和文漢読法』は四十二節あり、各節が次のように簡潔にまとめられている。

## 第一節

凡學日本文之法其最淺而最要之第一着當知其文法與中國顛倒，實字必在上虛字必在下。如漢文讀書日文則云「書ヲ讀ム」漢文遊日本日文則云「日本ニ遊フ」其他句法皆以此為例。

## 第二節

愈實之字則愈在首，愈虛之字則愈在末。如不讀書則云「書ヲ読マズ」（ズ即不字之義）可遊日本則云「日本ニ遊ベシ」（ベシ即可之義）。是其例也書字日本字所謂名詞也讀書遊字所謂動詞也。不字所謂助動詞也。大抵一句之中名詞在前動詞次之助動詞又次之。

要するに、「文法與中國相顛倒實字必在上虛字必在下」（中国語の文法と異なり、実字が上、虚字が下）、「一句中名詞在前動詞次之助動詞又次之」（日本文において、語の並び方は名詞、動詞、助動詞という順番である）などのような中国語と相違する規則を各節に列挙している。それに、「ナシ」（無字亦用此）、「モノ」（「者」物字亦用此）、「モ」（亦）、「コノ」（コレ、此）、「ノ」（的、之）などの頻繁に仮名文字として出現する語を五つの表にまとめて、意味の説明を加えた。第三十二節から取り出した和文漢訳例を見てみよう。

原文 道理上ノ眞理ニ關スル知識ノ退歩スル理ナク

直譯 無關於道德上之眞理的知識之退歩的理

譯意 關於道德上之知識決無退歩之理

上掲の例からわかるように和文（原文）から漢文（譯意）まで2段階の過程がある。まず、否定の助動詞である「ナク」（中国語「無」の意）を文頭に移動し、文中にある「活字」（動詞）の後に付けられた「スル」を取り除き、「ノ」を中国語の「之、的」に入れ替える。次にできあがった「直譯」文を分かりやすくするため、語順を調整することによって、「譯意」を完成させる。このように、文中にある仮名文字を取り除いて語の順番を入れ替えることを通して、意味的にも支障のない漢訳文を完成させる方法を和文漢読法という。これに関して、『和文漢読法』を出版した沈雲翔は次のように評価している。

「和文漢讀法一冊字不過三千言而指示讀和文之法簡要明晰苟通東文字母者一讀是冊未  
有不能讀東藉者」

（『和文漢読法』という小冊は三千字にも満たないが、紹介した和文を読む方法は簡単明瞭である。日本語の仮名文字さえ知っておけば、この本を読んだ後、和書を読めない人はいないはずである。）

要するに、短期間で日本文が簡単に読める方法を教えることが『和文漢読法』の最も評

価される点であると考えられる。これこそ、短期間で西洋文化を導入する実用主義のもと案出された実用主義的な日本語速成法（短期習得法）であろう。

同じく短期習得教育を目指しているのが『寄学速成法』である。『張綱日記』にも記述されているが、『寄学速成法』はもともと『広和文漢読法』という書名であった。これについては該当学習書の目録からも確認できる。改称の経緯に関わる関連史料は見当たらない。『寄学速成法』の「緒言」では、

「日本文字、原出於中国、故書中漢字十居六七、假名十不過三四耳…」

（日本文字は中国から伝わってきたため、文中には漢字が六、七割使用されている。仮名文字は三、四割程度しかない…）

と記述し、日本語では漢字の使用率が高いことを強調している。また、

「常書假名者有四種、曰感嘆詞、曰動詞形容詞之語尾、曰助動詞、曰屬詞是也。日文雖十之六七用漢字、而漢字之音韻則與中國異、如國讀クニ家讀イヘ是也、學譯日記者、必將學漢字而改讀音韻…」

（よく使われる仮名文字は4種類ある。即ち、感嘆詞、動詞・形容詞の送り仮名、助動詞、接続詞である。日本文において、漢字の使用率は六、七割を占めているが、漢字の読み方は中国語と違う。例えば、「國」は「クニ」、「家」は「イヘ」と読む。和漢譯を習得する人は必ず漢字の読み方を変えなければならない…）

と述べ、日本文にある漢字と漢語の漢字の差異は発音にあることを示唆し、日本語の漢字を漢語の漢字として扱うことを提案する一方で、漢字の意味や用法の相違について一切触れていない。さらに、林文潜は速成法（短期習得法）について明確に説明している。

「速成之法者何、蓋遇文中之漢字、仍以中國音讀之、而專求其行間之假名、識其意義、辯其作用也」

（速成法というのは、文中に漢字がある場合、中国語として理解する。ただし、その文の中にある仮名文字の意味や機能に注意するべきであるというものだ。）

ここでは、日本語は漢語から独立した言語として取り扱われるのではなく、漢字と日本文字（仮名）とが交じる言語であり、日本語を学習する際、仮名文字の意味を把握するだけで済むという『寄学速成法』の趣旨が表されている。つまり、『寄学速成法』は仮名文字を重視するという点において、梁啓超が提唱した『和文漢読法』に近い日本語観を持つと考えられる。

以下の文は梁啓超が1899年2月に『清議報』で発表した「論学日本文之益」（日本文を学ぶ益を論ずる）の一部であるが、林と梁が主張した「日本文にある漢字を中国語のままて理解し、文にある仮名文字の意味と使い方を記憶すれば、日本文をスムーズに読める」という速成法の教育方針と一致していることがわかる。

「日・文・漢・字・居・十・之・七・八、其・專・用・假・名、不・用・漢・字・者、惟・脈・絡・詞・及・語・助・詞・等・耳。其・文・法・法・常・以・實・字・在・句・首、虛・字・在・句・末。通・其・例・而・顛・倒・讀・之、將・其・脈・絡・詞・語・助・詞・之・通・行・者、標・而・出・之、習・視・之・而・熟・記・之、則・已・可・讀・書・而・無・窒・悶。」

（日本語で漢字は七、八割を占めている。仮名しか使わないのは接続詞や助詞のみである。実字が文頭で、虚字が文末に付く。語順を顛倒すれば読める。よく使われる接続詞や助詞を取り出して暗記すれば、読書に支障なし。）

要するに、林が「語順を顛倒してから読む」ということについて言及しなかったこと以外、林と梁が主張した「日本文にある漢字を中国語のままて理解し、文にある仮名文字の意味と使い方を記憶すれば、日本文を支障なく読める」という速成法の教育方針は一致している。ところが、林は『寄学速成法』の「緒言」で『和文漢読法』を批判し、次のように批判を加えた。

「近・人・著・有・和・文・漢・讀・法・一・書、最・稱・捷・徑、然・僅・摘・記・數・十・假・名、餘・概・置・之・不・理、過・於・簡・易、而・無・當・於・用・也…動・作・形・容・詞・等・詞・之・消・息、全・在・語・尾・之・變・化、最・關・係・係・於・文・義・者・也、作・者・乃・曰、凡・遇・緊・接・於・虛・字・活・字・下・之・假・名、皆・毫・無・用・處、抑・亦・誤・矣…且・即・僅・知・句・之・位・置、句・之・斷・續、不・求・解・其・文・句・之・義・不・可・也、則・作・者・沾・沾・於・字・句・之・間、引・而・不・發、抑・何・益・耶」

（最近『和文漢読法』という本を出版した人がいる。（日本語の）近道と言われるが、数十の仮名文字を取り出し、それ以外の仮名文字をすべて無視するという方法は簡単すぎて、用を果たさない…動詞、形容詞等の意味は全て語尾の変化次第である。作者は虚字、活字（動詞、形容詞などを指す）の下にある仮名は意味が無いと言っているが、そもそも誤りである…しかも、ただ文の位置、区切りだけを理解し、文の意味を求めないことはよくない。作者は文にある接続詞に拘り、それ以外を無視することは何の役に立つだろう。）

（『寄学速成法』 pp.2-3）

以上からわかるように、林が『和文漢読法』に対して最も批判している点は「過於簡易」である。日本文にある漢字をそのまま理解し、残りの仮名文字を弁別すれば意味が通じるとは思えないが、語尾の変化や文中にある仮名が複雑で、ただ数十個の仮名を出して説明するだけでは不十分であるという点である。また、林は「緒言」の最後に、「（本書は）和文漢読法の足りないところを是正することにより、多くの日本文に関心をもちながらも読

めない人に向けて作った本」(茲書悉矯和文漢讀法之弊…取其適於漢人講日文之用者、箸於編、以數百下鐘熟是日書…)であると述べている。即ち、『寄学速成法』は『和文漢読法』に基づき、不足している内容を補充し、間違った内容を是正するために作られた学習書であると言える。

### 3-2-2 音声教育の喚起

1900年頃に世に出た『和文漢読法』には、五十音図すら掲載されていなかった。翻訳を目指す当時の日本語教育は「音声」どころか、よく使用される仮名文字だけ知っておけば済むという実用主義のもと、音声教育があえて除外されていたのである。

ところが、『寄学速成法』の第二、三章では、五十音図を含め、清音、濁音、半濁音、撥音がすべて表に列挙されている。各仮名文字を「片仮名」、「平仮名」、「變體」<sup>18</sup>で表記し、音声的には「京音」(北京音)、「杭音」(杭州音)、「甌音」<sup>19</sup>の3種類の方言で、漢字に読み方を付している。表2は『寄学速成法』の一部を取り上げたものであるが、「あ」という仮名文字の発音を「京音」、「杭音」、「甌音」でそれぞれ「嚇」、「阿」、「挨」のように異なる漢字を使って表記している。これについて林は「字之音韻、務必口授、今姑注以京音及杭甌音焉、講譯學者、無籍於音韻、不妨任以一種音識之也」(字の音韻は必ず口授しなければならない。今は北京音、杭州音、温州音でつけているが、翻訳者は、音韻に拘らずいずれの音で弁別しても構わない)と述べた。こうした記述から、林は日本語の表音に配慮し工夫していたことがわかる。ただし、「務必口授」という願望と「無籍於音韻、不妨任以一種音識之也」(音韻に拘らずいずれの音で弁別しても構わない)という音声教育に対する軽視は、林の音声教育に対する矛盾を浮き彫りにしている。

表2 『寄学速成法』の五十音図

キ	カ	オ	エ	ウ	イ	ア	片 假 名
き	か	お	え	う	い	あ	平 假 名
𠵼	𠵼	𠵼	𠵼	𠵼	伊	阿	變 體
愷 意	哭 嚇	我	喚	烏	意	嚇	京 音
克 以	卡	壓	哀	烏	伊	阿	杭 音
克 以	坑	汪	哀	烏	伊	挨	甌 音



表2からわかるように、「ア」、「イ」、「ウ」、「エ」、「オ」などの発音を全て一文字で示している。例えば、京音ではそれぞれ「嚇」「意」「烏」「啖」「我」と仮名文字の発音に近い漢字で示している。ところが、「カ」、「キ」などは漢語音韻に存在しないため、発音を二文字の漢字で示すようになっている。これは鮮(2011)が言及した「反切法」である。表2に使われている「反切法」は「キ」という例を挙げれば次のように解釈できる。「被切字」の「キ」は「愷」(kǎi)という反切上字の母音「i」と「意」(yì)という反切下字の子音「y」を取り除くことによって、「ki」という発音を導き出すことができる。しかし、日本語と漢語のアクセントの構造が異なるため、「反切下字」のアクセントの部分が取り除かれ、「ki」の発音になる。

$$\overset{ki}{\text{キ}}、\overset{k\ddot{a}iy\grave{i}}{\text{愷意切}}:ki(k\grave{i})=k\ddot{a}\ddot{i}+y\grave{i}$$

しかし、「ア」、「イ」、「ウ」、「エ」、「オ」といった仮名文字の発音が漢語の発音と似ているにも関わらず「嚇」「意」「烏」「啖」「我」などを借りて示す方法は注目されなかった。鮮(2011)は、「ア」(嚇)といった表音方式について深く検討しなかったようである。ただし、『東語入門』<sup>20</sup>の日本語音韻に言及する際、「本書の主な表音方式は漢字である」と述べ、「発音の近い漢字を使って日本語を示し、発音の近い漢字がなければ、「反切法」を使う」と簡潔にまとめた。要するに、当時の日本語音声教育で、「反切法」は補足的な手段として使われており、最も用いられたのは「発音の近い漢字」という方法であろう。因みに、『寄学速成法』に記載された「五十音図」、「清音表」、「濁音表」、「半濁音表」、「撥音」を合わせた73(異なり語数)の仮名文字の中で、反切法で注音されたのは20個であり、それ以外の53個は直接漢字で示している(京音の場合)。つまり、「反切法」はやむを得ず案出された方法であり、主として使用された方法ではない。本稿では『寄学速成法』で「仮名文字」の発音に近い漢字がある場合は、それを選んで表音文字として付ける方法を「直接表音法」と呼ぶ。

以上『寄学速成法』の音声について考察した。『寄学速成法』では「五十音図」の各仮名文字の下に、3種類の方言それぞれについて「直接表音法」と「反切法」という2種類の表音方法を利用した。また、漢語の発音に似通った仮名を一文字対応させる「一漢字対一仮名」という「直接表音法」が主な表音方法で、一漢字で表音できない仮名については、「反切法」も併用していたことがわかった。

### 3-2-3 仮名文字に偏った文法記述

鮮明(2011)によると、清国人が使用した日本語教科書では「実字・虚字」という虚実二分法で日本語の「漢字」と「仮名文字」を区別し、日本語における助詞を漢語の虚字とする教授法を採用した。

しかし、『寄学速成法』は日本文における各要素を「実字・虚字」ではなく、日本語の術

語である「体言」、「用言」をそのまま借りて、「名詞」、「代名詞」、「副詞」、「接続詞」、「感嘆詞」といった語尾変化のない語を「体言」とし、「動詞」、「形容詞」、「助動詞」、「属詞」、「接詞」のような語尾変化のある語を「用言」と記述した。10種類の品詞を章ごとにその定義、文中における位置や役割などを説明し、類別にして具体例を取り上げて表にまとめている。以下は『寄学速成法』の第七章「副詞」から取り上げた内容である。

### 第七章 副詞

「用於動詞形容詞之上、以限制其語意之詞、謂之副詞、分十餘種、有時亦書假名及漢字帶假名者、如左表。」

(動詞、形容動詞の前に使われることにより、その語の意味を修飾する語を副詞という。10種類以上に分けられ、仮名で書かれる場合があり、また漢字に仮名が付く場合もある。下表を参照せよ。)

...	分量	場處	時候		
...	モトモ イササ カ最	スコブル 聊頗	チカク 近	アタカモ シバシ 暫今	書假名者
...	極テ 僅ニ	遙ニ 遠ク	常ニ 嘗テ 遅ク 早ク	名為語尾者	書漢字帶假

其漢字所帶之假名不外ニクテト數字耳、不變化也。

(漢字の後に付く仮名は、ニ、ク、テ、トに限定し、変化はない)

(『寄学速成法』 pp.18-23)

ここに見られるように、第七章はまず「副詞」について「動詞・形容詞の前に使用される」という語順と、「語の意味を修飾する」という機能から定義付けている。また、副詞の種類について簡単に言及してから文に出現する副詞の表記には「仮名文字」と「漢字仮名交じり」の2種類があることを示している。そして、通用の副詞を17種類に分類し、それぞれ「仮名文字」、「漢字仮名混じり」に分けて図表にまとめた。章の最後に副詞の表記について再び記述し、「漢字に仮名を帯びる場合、ニ・ク・テ・トという4つの仮名しかつかない」と強調している。このように、日本文における文字の表記が強調される傾向が強い。

前述したとおり、林文潜が「緒言」で述べていた「寄学速成法者以導震旦人讀文明邦種種哲学科学書籍也文明書籍東邦備已是書目的如是…」(『寄学速成法』)という本は、清国

人に先進国の哲学、科学などのような日本が既に所持している書籍を読むために作成された本である」という内容から、同書の趣旨が和文の読解能力の育成であることがわかる。この目的は梁啓超の著した『和文漢読法』と一致しているが、その相違点も同書の文法解釈の部分から窺える。『和文漢読法』では「實字必在上虚字必在下」(実字が上、虚字が下)、「…則当知其一定之排列法即每句之中副詞第一名詞第二動詞第三助動詞第四是也」(その配列法を知っておく必要がある。それは日本語の文には語の順位は副詞、名詞、動詞、助動詞であること)といった語順を強調する教授法に対し、林文潜は「緒言」で次のように述べている。「蓋遇文中之漢字、仍以中國音讀之、而專求其行間之假名、識其意義、辯其作用也」。即ち、文中の漢字を中国語として扱い、仮名文字とその意味や文における機能を弁別すれば、短期間で日本語を把握できるようになるという。要するに、日本文において中国語と思われる「漢字」を除いて、「仮名文字」、「漢字仮名交じり」のような最も漢語と相違した語を抜き出して説明し、その語の使い方を学習者に習得させる方法が『寄学速成法』で提唱されたことである。第十五章以後の章であえて「合字」、「符號」、「借字」、「和字」、「新字」、「聞字」などのような漢語にない表記を説明することもそのような理由からだと考えられる。

第二十一章「句之解剖」では、例文を用いて文における「主語」、「客語」、「用語」など文の成分を識別する方法を示し、「能知此例、未有不明斷句、不解文義者也」(この例さえ分かれば、文の成分を判別し、文の意味を理解できない者はいない)と述べ、日本文を読むための一般的な規則が求められていたことがわかる。このような規則が第二十二章「文之組織」で取り上げられている。文を「單文」、「複文」、「重文」と三種類に分類し、それぞれ範例を挙げて解説することによって、「詳辨此例、則于日文、更易迎刃而解矣」(このような文を分析できれば、日本文を更に簡単に理解できる)と主張する。最後に、和漢訳の実践例として一つの日本文を取り上げ、後に漢文を付した点にも、同書の目的として読解力や翻訳力の獲得があったことがわかる。

以上考察してきたように、『寄学速成法』の文法解釈は日中両言語における漢字にほぼ同義の漢字を用いるという利便性を借りて、語の表記の異なる点に重点を置き、仮名文字や漢字仮名交じりの弁別に着目したものであると言える。

#### 4 『寄学速成法』の特徴と位置づけ

本稿では『寄学速成法』の特徴を次のようにまとめる。

(1)『和文漢読法』を明確に批判している。清末の知識人は日本語の習得を通して、西洋文化が獲得できると信じていた。簡便な学習法として「和文漢読」が広く使われ、日本語学習者に大きな影響を与えていたと考えられる。『寄学速成法』が『和文漢読法』を「過於簡易、而無當於用也」などと強く批判し、新たな日本語学習法を案出しようとしていた

点は注目に値する。

(2)読解・翻訳を追求した清末の日本語学習者にとって、会話能力は必要でないため音声は文字から分離してしまった。しかし、『寄学速成法』は『和文漢読法』になかった五十音図を載せるだけでなく、音韻の面にも配慮し、音を付すことを試みた。さらに、中国の伝統的な表音法を参照して仮名文字に音を付する「直接表音法」や「反切法」といった新たな日本語表音法を導入し、音声教育を強調しようとした。しかし、音声教育を提唱する『寄学速成法』ではあるが、単語リストを付けず、本文に記載されている単語にさえ振り仮名を付していない。このような点から、日本語の発音や会話が十分に考慮されていたとは言えない。

(3)『寄学速成法』は『和文漢読法』を批判し、より優れた学習法を案出する姿勢を見せたが、結局『和文漢読法』に修正を加えた学習書の範囲にとどまるものとなった。漢字という日中両言語における共通点を利用しながら、漢字以外の表記である「仮名文字」と「漢字仮名交じり」に重点を置き、常用の仮名文字を暗記し、語尾変化の規則を習得し、文の成分を分析するという学習方法を提唱した。結果としてその内容は文法解釈を中心とした記述に終始しており、語の使用方法については触れず、『和文漢読法』と同様に言語運用能力への配慮を欠いた日本語学習書であった。

## 5 終わりに

以上清末の日本語学習書である『寄学速成法』について考察してきた。音声教育の面では、「直接表音法」を主にして、「反切法」を補助的な方法として使用していたことがわかった。一方、文法教育に関しては、同形同義語が多いため、漢字以外の仮名文字に重点を置いて記述していることが明らかになった。現時点では、『寄学速成法』は、『和文漢読法』に対する批判を唱えながら、それを土台として、不足分を補充し錯誤を是正することにより、日本語教育の速成法を発展させたと言える。現時点では、『寄学速成法』に関する史料が不足しているため、該当学習書は当時の日本語教育にどのような影響を与えていたのか、どのような評価を得ていたのかなど未解決の課題も残っている。さらに、史料を収集して清末日本語教育の実態を探っていきたい。

## 注

- (1) 当時の外交に必要な翻訳人材を育成するため設置された。京師同文館（1862年）、上海広方言館（1863年）、広州同文館（1864年）の3校があった。最初は英文館しかなかったが、その後俄文館（ロシア語）、徳文館（ドイツ語）などが開かれ、1897年東文館（日本語）が初めて京師同文館に開設された。
- (2) 日中両国は文字が同一で、人種も同種であるという観念が清国以前から主流であった。

- (3) 当時、多くの知識人は日本語の習得を積極的に提唱していた。例えば、張之洞は『勸学篇』で「至各種西学书之要者、日本皆已译之、我取径于东洋、力省效速…若学东洋文、译东洋书、则速而又速者也。是故从洋师不如通洋文、译西书不如译东书」と主張し、西洋知識を取り入れる方法として、日本語を学ぶことを提案した。また、梁啓超も『論学に本文之益』で「学日本文者、数日而小成数月而大成」と述べ、日本語が短期間で習得できるとアピールした。
- (4) 『和文漢読法』などのような独学者向けの日本語学習書も存在していた。
- (5) 日本語を教える学校である。劉（2005）によると中国人を学習の主体、教育の対象とし、主に日本語教育あるいは日本語を通して普通教育を行う、日本人または中国人が設立した学校のことであると定義される。
- (6) 章（2013）は、『寄学速成法』を杭州日文学堂の学生である林文潜の傑作と評している。しかし、当書の内容については分析を行わなかった。
- (7) 孫詒讓（1848-1908）。清末の教育家、浙江省瑞安の出身。1903年、林文潜と師範教育研究会を開設したが、林の死去により中止になった。
- (8) 林文潜（1897-1903）字州龍、浙江省瑞安の出身。1901年1月頃杭州日文学堂に入り、8月頃南洋公学の特班生として入学し、日本語教科書の翻訳を担当していた。また、同時期に、支那翻訳館で翻訳者を務めた。その後、瑞安に戻って日文速成蒙学を創立した。1903年3月日本へ留学したが、病気で帰国し9月に死亡。呉（1965）は林を「晚清先進革新人士」と評価している。
- (9) 仏教の浄土真宗大谷派の本山である。日清戦争後清国で布教活動を展開し、教育事業も積極的に推進した。その教育事業として、杭州日文学堂を始めとする6校の東文学堂を作った。杭州日文学堂（1899.1）の他、金陵東文学堂（1899.1）、蘇州東文学堂（1899.5）、蘇州有隣学堂（1903.10）、泉州彰化学堂（1901.8）、彰州日華書院（1902.4）。
- (10) 張桐（1860-1942）、林文潜の友人。『張桐日記』（原名『杜園日記』）は1888年から1942年まで記載された。  
 (1) 『張桐日記』p.87。  
 (2) 『訳林』が1901年、伊藤賢道、林長民などにより主編された中国浙江省最初の翻訳雑誌である。  
 (3) 林長民（1872-1925）1899年10月頃杭州日文学堂に入学。その後『訳林』の主編を務めた。  
 (4) 宋恕（1862-1910）清末の有名な知識人。  
 (5) 劉建雲（2005）pp.240-247。  
 (6) 魏（2015）p.112。清末の日本語教育を「独学の日本語学習活動」、「清国本土における東文学堂教育」、「留学生の日本語教育」、「近代学堂における日本語教育」と分類した。  
 (7) 羅普、字孝高。生年月日不詳。康有為の弟子。当時東京高等専門学校で留学。  
 (8) 仮名文字は漢字を变形してできた文字だと言われるが、ここの「變體」字は該当仮名の変形された元漢字を指す。  
 (9) 甌：温州の別称。  
 (10) 『東語入門』中國最初の日本語学習書。1895年出版。編集者は陳天麟。

## 参考文献

- 丁石孙など（1998）『蔡元培全集 第十五卷 日記1894-1911』浙江教育出版社
- 海晓芳（2011）「漢語語法研究中的詞類劃分及術語演變問題」『東アジア文化交渉研究』第4号 pp.309-325

- 李長波 (2010) 『近代日本語教科書撰集』第七卷 『和文漢讀法』(梁啓超原著・沈雲翔編) クロスカルチャー出版 pp.1-33
- 李海 (2010) 「梁啓超の『和文漢讀法』をめぐる日中批評史に関する一考察」『多元文化』10号 pp.113-128
- 梁啓超・羅普 (1900) 『和文漢讀法』勵志社
- 梁啓超 (1936) 「論学日本文之益」『飲氷室合集』pp.80-82 上海中華書局
- 林文潜 (1901) 『寄学速成法』温習瑞安寄社 温州市図書館所蔵
- 劉建雲 (2005) 『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』学術出版社
- 沈國威 (2009) 「近代東亞語境中的日語——從方言到文明的載體」『或問』NO.16 pp.85-97
- 魏維 (2015) 「清末日本語教育に関する研究の必要性」『比較日本文化学研究』第8号 pp.105-119
- 呉洗凡 (1964) 「晚清先進士林文潜」『温州文史資料 第七輯』温州市政協文史資料委員会編1991年12月 浙江省新聞出版局
- 鮮明 (2010) 「清末の中国人が使用した日本語教科書における中国と西洋の言語学的手法の利用」『文化交渉による変容の諸相』Vol.2 pp.311-326
- 鮮明 (2011) 『清末中国人使用的日語教材——一項言語学史考察』中央編訳出版者
- 謝紀鋒 (2012) 『反切』商務印書館
- 徐敏民 (1993) 「戦前中国における日本語教育方法に関する比較考察」『筑波大学教育学系論集』18巻1号 pp.95-105
- 曾德興 (1983) 「清末の切音字運動に関する一考察」『中央学院大学論叢・一般教育関係』18巻 pp.17-47
- 張綱・兪雄 (2003) 『張綱日記』上海社会科学院出版社
- 章小麗 (2013) 「杭州日文學堂學生之研究——以林長民與林文潜為例」『浙江外國語學院學報』2013年1月第1期
- 張之洞 (2002) 『近代文獻叢書 勸学篇』上海書店出版社

—ぎ・い、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学—